

マルコによる福音書 9:2～9:13 「神の光を輝かす」

2025年3月9日(主の日)

水曜日からレントが始まりました。主イエスのご受難と十字架を思って過ごす40日と6日の日々です。わたしたちは昔の人や他の教派のように断食はしませんし、ことさら暗い表情を無理につくって過ごすなどということはしません。レントのあいだもすべての日が主イエスの恵みのうちにある喜びの日々だからです。改革教会はそう考えて歩みが続けてきました。同時に、レントのときだけでなく、いつもわたしたちは十字架を見上げて生きています。レントのときだけ思い出せばいいというのではないのです。だからこそ、このレントはいつにもまして主イエスのご受難を覚え、主の十字架を見上げるために、礼拝と聖書と祈りの日々として過ごしたいと思います。わたしたちの生活における信仰の行いは、なにかたべものを制限したり、暗い顔つきをして過ごすのではなく、聖書の御言葉の礼拝と祈りにつikirからです。

さて、先週の礼拝に与えられました箇所最後の、9:1はこのように語られています。「また、イエスは言われた。『はっきり行っておく。ここに一緒にいる人々の中には、神の国が力にあふれて現れるのを見るまでは、決して死なない者がいる。』」

この箇所全体で、主イエスのご自分に従う者、自分を捨て、主イエスと福音のために自分の命をささげる者は、まことの命が与えられる、とおっしゃいました。主に従うところにこそ、わたしたちが生きるべき道があるとおっしゃいました。そして今の言葉を語られたのです。いったいそれってだれだろう？とつい思ってしまうような言葉です。ペトロだろうか、それとも本日でてきたペトロ、ヤコブ、ヨハネか、あるいは12弟子みんなか？もしいつの時代でも立派な信仰者にはこの約束が与えられているとするなら、伝説などがあるのだろうか、教会のあの人か、あの立派な牧師か、そんなことを考えはじめてしまいそうです。けれども、先週の繰り返しになりますけれど、死なないというのは生物としての生命ではなくて、まことの命が与えられる、ということですから、死なない者とは、主の恵みに生かされ、主に従う道を歩む者、主の命をいただいた人のことです。それはすなわちわたしたちにほかなりません。主の恵みによって罪の滅びから救われて永遠の命が与えられ、主に従う喜びの命を生きているわたしたちのことです。

もちろん主イエスは目の前の弟子たちみんなにむかってもおっしゃったと思います。そう考えると、果たしてペトロはこの主イエスの言葉を自分のこととして理解したのだろうか、と思ひめぐらします。ペトロは確かに、この後主イエスを裏切ります。あんな男知らない、と3度言うのです。しかし、復活の主によって赦され、主に従う、まことの命を与えられた者にふさわしい歩みをし、福音を宣べ伝え、教会を立てます。けれども、このマルコ福音書のここまでの話によるならば、このときのペトロはまだ、理解の不十分な

弟子でしかありませんでした。本日の箇所は「六日の後」と始まっています。主イエスが苦難を受け、殺され、三日の後に復活すると弟子たちにお話になったところは「弟子たちに教え始められた」と記されていました。この受難予告から、主イエスのご受難と復活について弟子たちに教え始められたのです。そして、六日経ちました。弟子たちはまだ理解していなかったかもしれません。そこで主イエスはペトロ、ヤコブ、ヨハネの3人の弟子を連れて、山に昇られました。六日の後とは七日目とも言えます。七日目と聞いて思い出すのは、神の世界の創造です。神は世界をお造りになり、七日目に休まれました。そこで、造られた世界を極めて良いものとしてご覧になったのです。7日目に光輝く天の姿とは神がご覧になる世界の完成です。この光り輝くお姿でエリヤとモーセと話をするお姿も極めて良い、天での完成での姿といえるでしょう。主イエスは3人の弟子にこの終わりの日の完成のお姿をお見せになったのです。そしてまた、七日というのはモーセとの関係でも出エジプト記に記されます。出エジプト記24：13-18「モーセが山に登って行くと、雲は山を覆った。主の栄光がシナイ山の上にとどまり、雲は六日の間山を覆っていた。七日目に、主は雲の中からモーセに呼びかけられた。」そして、モーセはシナイ山に登り、幕屋建設の指示の律法を神からいただくのです。今日の箇所でも主イエスが山に昇られたことを無視するわけにはいきません。山は神と出会うところです。主イエスは祈るために何度も山に行かれました。ここでも、山に昇ったのは、神の御許へ戻られる、その時の姿をお見せになるためであったと思います。そして、今聞きましたように、モーセは山で六日間待ちました。神は七日目にモーセに声を掛けられたのです。六日間は神の栄光があらわれる準備の時です。主イエスの変貌も六日後に起こったのは、この光輝くお姿が、まさに神の栄光が現れる特別な出来事であったということです。それは、「神の国が力にあふれて現れるのを見るまでは、決して死なない者がいる」。この主イエスに従う者が命を与えられ、最後に見る光景を、この3人の弟子は今、見させていただいたのです。天に先に召されたエリヤとモーセ、そして主イエスが光り輝いて互いに語り合う。これが天上の姿です。3人が何を話していたかはここには記されていませんが、ルカによる福音書ではこう記されています。ルカによる福音書9:31「二人は栄光に包まれて現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた」。エリヤとモーセが旧約を代表し、主イエスが新約を代表しているとすれば、この3人が語っていることは旧新約聖書をつらぬいている中心的なことがらに違いありません。それは救いが、主イエス・キリストの十字架の死によって完成するという事です。そして、その主イエスのお姿が栄光に輝いていた。主イエスの救い主としての栄光は、十字架の苦しみと死によって実現するのです。十字架が、もちろん復活があってこそ、救いの完成の栄光の光が与えられるのです。

けれども、これは最後の日の完成の話です。この時、3人の弟子たちはこのことを悟っていたわけではありません。ただ、すばらしいものをみているのは確かだということはわかったのでしょう。ペトロは仮小屋を建てましようと言います。仮小屋を立てることで

3人がここにとどまって、この素晴らしい光景が続くようにと思ったのでしょう。何を言ったらよいかわからなかったペトロなりの発言です。もちろんここでもペトロはまどをはずしていたのですけれど。もし本当に主イエス、エリヤ、モーセが主の十字架について話しておられ、それが聞こえていたとしても、やはりペトロには理解できなかったのだと思います。

すると、雲が現れてみんなを覆いました。モーセがシナイ山に昇った時と同じです。主なる神は雲の中から語りかけられるのです。「これはわたしの愛する子、これに聞け」。そして弟子たちが気がつく、ただ主イエスだけがおられました。光り輝いているのではなくて、これまでと同じように自分たちと同じ姿、格好をしている主イエスだけがおられたのです。主イエスは確かに栄光をお受けになるのですが、今は、その姿を一瞬見せていただけだけです。これから主イエスはまさにその神の栄光をあらわすために、十字架への道を歩いていかれます。それは決して、力強いお姿、ましてや光輝いているお姿ではありません。それどころか、死を覚悟なさり、しかし近づく死を恐れることすらある姿です。苦難を与える者たちに逆らわず、鞭打たれて苦悶する姿、人の目には情けなく、みすばらしく見える、そういうお姿をさらすのです。この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白い、とはほどとおい傷だらけの汚れたお姿になられるのです。まさに、ペトロがわきへお連れしていさめた、「そんなこと、あってはならないことです」というそのお姿です。主イエスに従う、とはこのようなお姿の主イエスに従うことです。自分の十字架を背負うとは、この苦難の主イエスと自分の姿を重ねるように生きることにはほかなりません。しかし、雲の中から神は言われます。「これはわたしの愛する子。これに聞け」。この言葉は、主イエスが洗礼者ヨハネから洗礼を受けられた時の言葉と全く同じです。これから人として地上を歩む主イエスに聞くようにと神がおっしゃり、主イエスは地上での宣教をお始めになりました。今、地上にいる弟子たちは、苦難を受け、殺される、十字架へと歩み始めた主イエスに聞くようにと、神はおっしゃるのです。今、眼の前には主イエスしかおられません。エリヤやモーセだけではなく、だれもいない。聞くべき方、後に従うべき方はこの主イエスしかおられないのです。

この3人の弟子が、光り輝く主イエスを少しのあいだでも目撃したことが、この後地上をしたがって歩むのに、どういう影響があったか。励まされ力づけられたのか、あれは一瞬のことだったとがっかりしたのか、何も記されていません。かわらずあまりよく理解しなかったであろうことだけはわかります。けれども、わたしたちは違います。あのお姿が復活のお姿であり、また終わりの日の救いの完成、世界の完成のお姿であることを知っています。わたしたちは、主イエスの栄光のお姿を、毎週の主日の礼拝で見させていただいています。苦難を受け、十字架で死なれた主イエスは、それによって人の罪を赦し、復活なさって栄光の中におられます。わたしたちは、主の日の礼拝で、礼拝の御言葉でその主イエスにお会いしているのです。主イエスはまちがいなく神の独り子であることを知るの

です。あの弟子たちと同じように、しかしその恵みをはっきりと知りながら、礼拝という山の上で主イエスに出会わせていただいているのです。

けれども、この栄光をいつまでも、自分の好きなように見られるわけではありません。礼拝が終わったら、わたしたちも山を降ります。それぞれの生活に送り出されます。それぞれの十字架を背負うのです。主が傷つきぼろぼろになり、十字架で命を捨てなくてはならなかったほどの、この世の罪をみます。また、私達自身の罪をみなくてはなりません。罪の中に見る主イエスのお姿は、貧しく多くの苦しみを負ったお姿です。この世界は争いがなくならず、自分自身も人を愛しきれず、かえって無視したり、憎んだりして生きる始末だからです。まだ完成していないのです。わたしたちの歩みは、終わりの日の完成に向かっていくことは確かです。最後には主が完成させてくださるとの希望をもっています。けれども、決して楽観できるものではありません。この世において、信仰を保ち、礼拝を続け、福音を伝え、弱い人苦しんでいる人とともに歩む。十字架を背負って歩むのがわたしたち主イエスの弟子です。けれどもそれは独りで歩いているわけではありません、何よりも主イエスがともにいてくださいます。いえ、礼拝からおくりだされたから、洗礼をうけたから、これからは自分でがんばります、というわけではありません。主がおられなければ、わたしたちは一歩も歩くことができません。主イエスがわたしたちの重荷をともに背負ってくださるのでなければ一歩も歩けない。わたしたちは罪の重荷に、おしつぶされてしまう、背負って歩むことなどできないからです。

主イエスがおっしゃったように、ご自身が死者の中から復活なさるまでは、この主イエスの栄光は理解できないのです。ここでは、主イエスはエリヤと洗礼者ヨハネを重ねています。人々はエリヤのあとにメシアが続くと信じていましたので、力強い指導者があらわれればあれがエリヤ、これがエリヤかと考え、けれどもどれも違った、まだエリヤはきていない、と信じていました。けれども実際は、指導者たちがいないがしろにし、ヘロデが殺してしまったあのヨハネがエリヤだったのです。ですから、その後にくられたこの主イエスがメシアです。けれども、それは誰にも理解されませんでした。主イエスの十字架と復活を受け入れるまでは、おしつぶされそうな罪を背負ったまま希望なく歩むしかないので

す。

だからこそ、主イエスをご自分の輝く姿を見せてくださり、神が「これはわたしの愛する子。これに聞け」とおっしゃったことをわたしたちが見て、聞くことが本当に大切だと思わされます。礼拝において主の輝きを見せていただき、主イエスに聞き従うことを毎回新しくはじめる。ここにわたしたちの生きる道があるからです。私たちは、この主イエス・キリストが、復活して永遠の命に生きておられる救い主であり、世の終わりに父の栄光に輝いてもう一度来られる方であることを知っています。その日を希望として、これからも礼拝生活と、主に従う祈りの生活を続けたいと願います。

レントを歩み始めました。主の十字架はいつもわたしたちの前にありますけれど、特に

そのことを思い起こす46日を過ごします。わたしたちの、耐えきれない罪を主イエスが十字架によって贖ってくださった、この恵みをあらためて思い、礼拝と祈りの生活を続けましょう。